

伝統文化のコミカライズによる伝統文化への貢献 —かまたきみこ『KATANA』を例に—

早野慎吾(都留文科大学) かまたきみこ(マンガ家)

要旨

伝統文化(伝統工芸)のひとつである日本刀をテーマとしたマンガ作品『KATANA』(かまたきみこ作)を例として、伝統文化のコミカライズが伝統文化の発展に貢献している実態を分析する。作者のかまたは、本作品制作のために刀匠や研師、鞆師だけでなく、炭職人など日本刀製作に係わる様々な職人に対して対面調査を実施しており、そのことで日本刀製作のリアルな過程を作品に取り込むことに成功している。そのため本作品の読者には、日本刀そのものだけでなく日本刀製作に関心を持つ者も多い。さらに、かまたは「お刀鑑賞会」「鍛刀道場での炭切体験」などのイベントを実施することで、刀職人への世間的関心を高めている。衰退傾向にある伝統文化は、まずその存在を知ってもらい、身近に感じてもらうことが重要であると言われている。伝統文化のコミカライズやイベントは、伝統文化を知ってもらうきっかけを作り、担い手を生み出すきっかけをつくりことができる。

キーワード：『KATANA』、コミカライズ、伝統文化、刀剣ブーム、後継者問題

1. はじめに

現在、伝統文化の衰退が大きな課題となっている。星野(2011)では、伝統文化である神楽の衰退を論じている。伝統工芸の継承を扱った柴田(2015)では、「概ね衰退の傾向にある。消滅寸前となっているものすらある」(p. 72)と論じられている。文化庁では「文化芸術の振興に関する基本的政策」の「(3)伝統芸能の継承及び発展」(H27 閣議決定)において、後継者育成の重要性が記載されている。早野(2019)では、伝統芸能衰退の最大の要因は継承者問題であることを論じている。

かまたきみこ作『KATANA』は、伝統文化(伝統工芸)である日本刀に関する作品で、日本刀製作の過程を詳細にコミカライズ¹⁾している。かまたは、刀匠や研師、鞆師だけでなく、日本刀の鍛錬に使用する炭を生産する製炭職人など、日本刀に係わる様々な職人に詳細な取材を実施しており、2019年度より日本刀文化振興協会の評議員にも選定されている。本研究では、伝統文化のひとつである日本刀をテーマにした『KATANA』を例として、伝統文化をコミカライズすることで継承問題を含む伝統文化の発展にどのように寄与することができるか、また、そのコミカライズを活用することで、どのような伝統文化教育が可能であるかを分析する。なお、本稿では、日本刀製作に関わる職人を総称して刀職人と表現する。

2. 日本刀製作のコミカライズ

江戸期まで日本刀は武士の必需品とされたが、明治期の廃刀令で実用的な意義が失われ、現在では美術的価値においてのみ製造されている。日本刀の評価として谷村(1981)は、「日本刀は、美術的、精神的、実用的の三要件のもとに評価されるべきである」(p. 351)としている。水木(2019)では、「一体何が今日刀剣の価値を定めるかと言えば、それは「美しさ」の格であり、切れ味の評価は影響しない」(p. 40)と美術的評価を強調する。

谷村(1981)は、「刀身そのものが芸術品であり、これを所持する人の心を感動せしめるある美しさをもつことが、名刀の必要条件であり、それが精神的価値につながる」(p. 351)とある。木谷ら(2011)では、地域伝統芸能の継続には地域が共有する知的体系(地域文脈)が必要であると指摘している。つまり、伝統文化の継承には、①その文化に関する知識と②それを価値あるもの認識する2点を国や地域で共有することが重要になる。

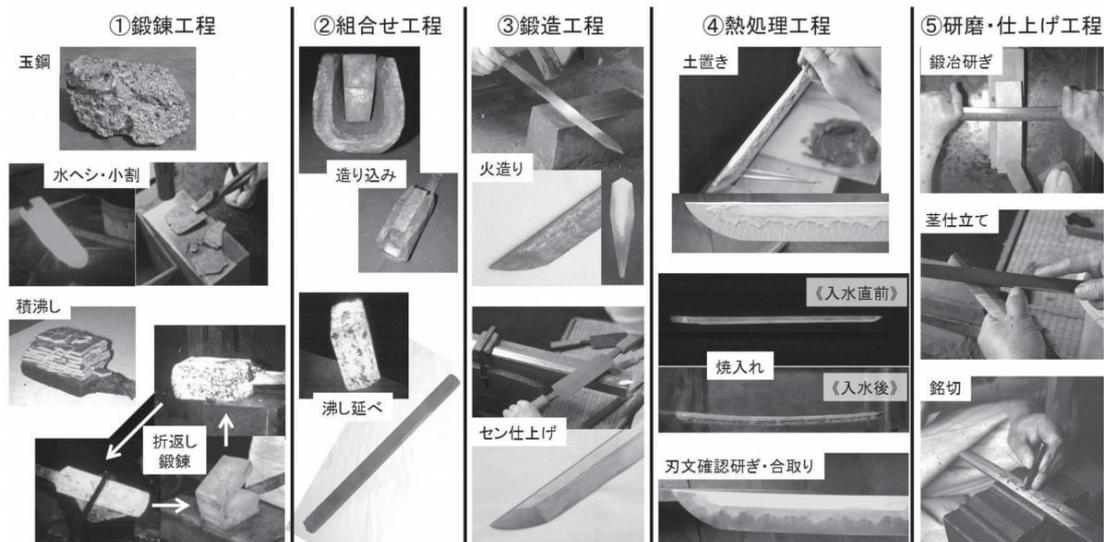


図1 日本刀の製作工程(佐々木 2015 p. 504)より

佐々木(2015)では、日本刀製作工程を5つに区分して解説している(図1)。研ぎの工程に関して、研師の平井隆守は、さらに詳細に解説している(「日本刀研磨御刀研磨処楽屋」)。まず工程を大き下地研ぎと仕上げ研ぎに分けて、下地研ぎを金剛砥・備水砥・改正砥・中名倉砥・細名倉砥・内曇刃砥・内曇地砥の7工程、仕上げ研ぎを下刃艶・地艶・拭い・刃取り・磨き・ナルメの6工程に分類している。そして、最初の工程の金剛砥では、「錆を落とし、刃コボレや刃斑を直す。錆を平らに研磨して錆線を出すようにする」と解説されているが、「刃斑」(地鉄に現れるまだら模様)や「錆」(刀身の側面にあり高くなっている筋)などの専門用語が使われており、日本刀に関する基礎知識がないと、解説を理解することすら困難である。つまり、日本刀の製作は、どの工程においても専門性が高く、素人には近寄りづらい状況になっていることがわかる。

かまたきみこ作『KATANA』

『KATANA』(以降本作品)は、2004年10号『月刊ホラーM』に読み切り掲載後、シリーズ化して発行紙を変えながら2014年から『ASUKA』に移籍して現在も連載中(2021巻:2024年8月時点)のコミックである。高校生の成川滉(図2)は、代々続く刀鍛冶の末裔で、若くして日本刀の研磨の技術を身につけて、滉は刀自身の姿(=魂魄)を関知する特殊能力の持ち主で、その能力のために刀にまつわる数々の不思議な事件に巻き込まれてしまうストーリーである²⁾。



図2 主人公の成川滉

刀匠(とうしょう)

刀匠とは、日本刀を作る職人で、「刀鍛冶(かたなかじ)」「刀工(とうこう)」などとも言われる。刀匠の浮世絵では、尾形月耕(1985-1920)作『月耕随筆』「稲荷山小鍛冶」が有名で、「小鍛冶」とは、能楽の演目のひとつである(図3)。夢のお告げを受けた一条天皇(980~1011)の命を受けた勅使の橘道成は、刀匠の三條小鍛冶宗近に刀を打つよう命じるが、宗近は相槌を打つ者がいないためにできないとことわる。それでもやれと命じられた宗近は、稲荷明神に参拝して助けを求めると、稲荷明神の化身が手助けをして、無事に刀を鍛え上げるという話である。



図3 「小鍛冶」(能尚会 HP³⁾)

本作品の第46話では、その「小鍛冶」を題材にした物語が展開する。作中では、三人の稲荷明神の化身が登場し、古式鍛錬の「三丁掛」をコミカライズしている(図4)。三丁掛とは、主鍛冶(刀の形状や品質を決定する)に対し、三人の相槌(大きな槌で鍛錬する)が交互に鍛えていく技法である。

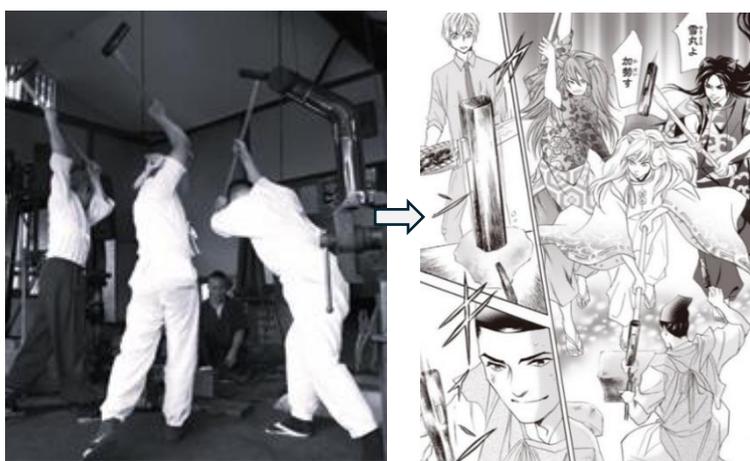


図4 三人掛の場面⁴⁾

この場面では、現代の刀の製法が、平安時代を舞台にした能楽「小鍛冶」につながる。しかし、「小鍛冶」の演目に忠実ではない。たとえば、「小鍛冶」の相槌は1人(図2)であるが、『KATANA』では3人となっているなどの違いはある。

図5は、鍛造時のコミカライズである。かまたは、刀匠のコミカライズを次のように述べている(早野・かまた 2004)。

年配の刀匠さんの仕事の時の自然体で力が抜けていながらも的確な動作や、取材した後亡くなられた刀匠さんの作品、思い出などを作品に込める。そして、生きている人間としての職人さんの魅力、当たり前のようにされている仕事の魅力をマンガのキャラクターに写し取り、読者に追体験していただく。

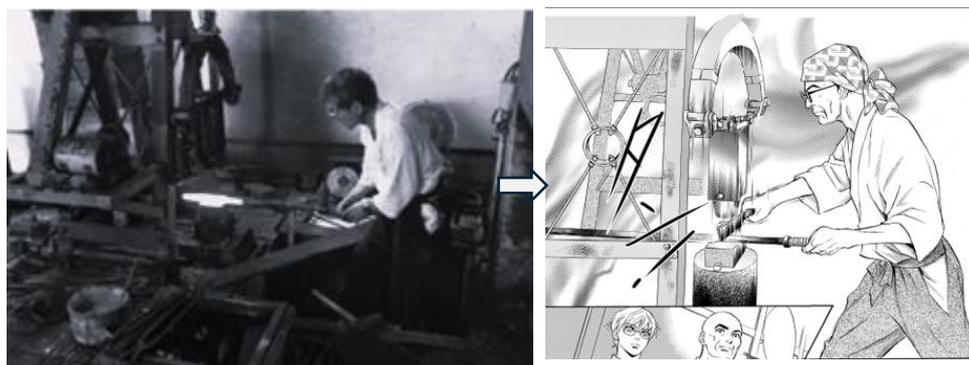


図5 鍛造

番鍛冶(ばんかじ)

番鍛冶とは、「鎌倉初期、後鳥羽上皇が諸国から召出して各月交替に院に勤番させた刀鍛冶」(『日本国語大辞典』)のことで、「後鳥羽上皇が山城国の粟田口，備前国、備中国から13人の刀工を御所に召し寄せ月番を定めて作刀させ(これを御番鍛冶という)、自らも焼刃を施し、菊花文を刻む」(辻本 1981)とある。

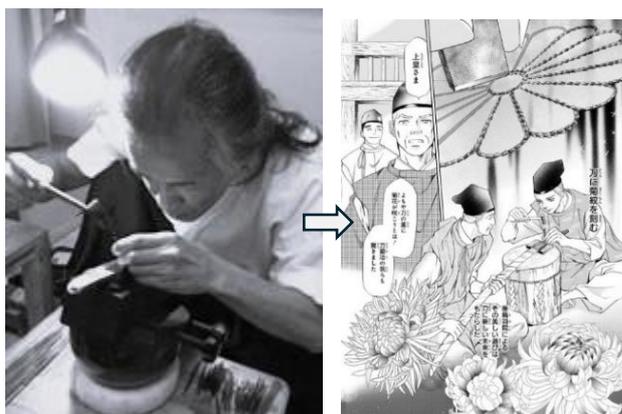


図6 銘切り

図6は番鍛冶に関する内容をコミカライズしたもので、右図は、後鳥羽上皇が銘を切る(刀に彫る)場面を描いている。菊は、邪気を払うと信じられており、平安期、旧暦9月9日の重陽の節句には、菊花酒を飲む習慣があった(『菅家後集』菅原道真)。後鳥羽上皇は菊を好み、自らの紋章とした。その後の天皇も継承することで、菊紋が定着する。その後、16葉の菊紋が皇室の紋章として使われるに至る。

かまたは、この場面について「現在の皇族の象徴である菊紋様は、この刀に銘を切ったのが最初と言われている。上皇が銘を切るシーンを描いて、読者にこの情報を整理して視覚的

に伝える」と述べている(早野・かまた 2024)。かまたは、史実や伝説を描くことで、刀の製作の歴史や伝統性などを読者に伝えようとしている。

研師(とぎし)

主人公の成川滉は研師という設定になっており、かまたは、研師に対する緻密な取材により、実際の研師の仕事を忠実に再現している。図7は研師の動作の一部である(左：阿部一紀、中：秋田勇喜、右：本阿弥毅)。かまたは多くの研師に取材を実施し、研師の目線の位置や指使いなども再現している(図8)。かまたは、研師から、マンガ作品においてどのように刀を表現するかなどの有益なアドバイスを受けたとのこと(早野・鎌田 2024)、職人の動作や刀の芸術性が見事に表現されている。



図7 研ぎ師の動作



図8 研ぎ師のコミカライズ

栗田口(あわたぐち)

栗田口とは、山城鍛冶の刀匠の家名で、京都の栗田口に住んだことからこの系統を栗田口派といい、栗田口派の鍛えた日本刀も栗田口と呼ぶ。狂言演目の『栗田口』は、栗田口が刀

の銘であることを知らない大名と太郎冠者を素破(スッパ:詐欺師)が、自分が栗田口であると言ってだます話である。日本刀に詳しくなければわからない栗田口であるが、本作品中では、説明的にならずに解説している(図9)。また、栗田口に合わせて砥石の解説も行っているが、上手くストーリーにはめ込んでいる。



図9 研ぎの解説

3. 刀剣ブーム

特定の分野に関心を持たせるには、アニメ、マンガ、電子ゲームが優れている(早野ら2019)。マンガだけではなく、アニメや実写映画にもなった『るろうに剣心』(和月伸宏)や『BLEACH』(久保帯人)、電子ゲームからアニメ、舞台にもなった『戦国 BASARA』(カプコン)、『刀剣乱舞』(CLARITY STUDIO)などは、多くの女性ファンを獲得して、いわゆる刀剣ブームを引き起こした。東建コーポレーションが運営する『刀剣ワールド:名古屋・丸の内』のHP⁵⁾では、「刀剣乱舞が配信されて以降、全国の各施設がゲームとのコラボレーションイベントを企画。これによって、長年、来場者数に伸び悩んでいた施設や、観光産業不足によって観光客が減少傾向にあった地域などへ、多く「刀剣女子」(刀剣が好きな女性、または刀剣乱舞が好きな女性ファン)が訪れるようになりました」と解説している。

刀剣ブームにより、日本刀への関心は高まったが、それが刀職人の増加につながらない現実がある。全日本刀匠会登録の刀匠は1989年では300人であったが、2017年では188人に減少している(ORICON NEWS. 2017. 8. 13 付)。後継者不足の問題は、NHK NEWS WEBでも「日本刀を未来に伝えるー伝統の継承と課題ー」(2021. 12. 21 付)や、読売新聞オンラインでは、「ゲームや漫画で火が付いた「刀剣ブーム」、文化観光の柱にも…刀鍛冶は減少し技術継承が課題に」(2024. 5. 12 付)と題する新聞記事が出ている。刀剣ブームの勢いは衰

えず、愛刀家が若い女性や外国人にまで広がり、日本刀を文化観光の柱にする自治体が出てきている。さらに、美術品としての価値が再認識されるなか(図 10)、刀匠が減少している事を問題視している記事である。

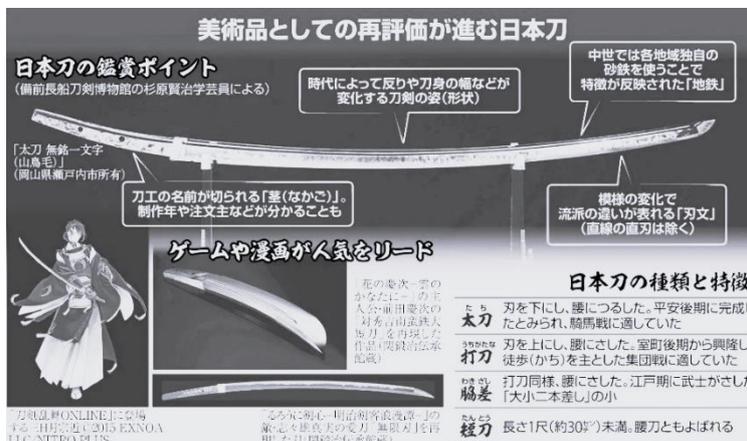


図 10 読売新聞オンライン 2024. 5. 12 付

4. 『KATANA』読者へのアンケート調査より

2024年6月8日・9日、かまたは、PIXIV FANBOX (SNS)において、「2~300文字で、『KATANA』の漫画を読んだり、作者かまたの取材や、日本刀の職人さんや関係者との交流で伝統文化・日本刀文化に対する認識が変わったり、行動が変わったりした点はありますか？(実際の刀に感心が高まった等…)」との内容で、アンケート調査を実施した(結果は本稿末尾の【資料】に記載)。なお、「伝統文化の分野のコミカライズ作品、あるいは作家の活動が、職人さん、関係者さん、読者さん達の中にどのようなフィードバックを起こしているのか」を知るためのアンケートであることも記している。

刀職人の回答には、「(一般人には)敷居が高く、どうしても構えてしまう」(三上高慶: 刀匠)、「側から見れば近寄り難い日本刀の職人世界」(木下宗風: 装剣金工師)とある。刀剣ブームによって、日本刀とファンとの距離は縮まったが、刀職人とファンとの距離は、あまり縮まっていない。「鎬」や「刃斑」のような専門用語が多いのも心的距離が近づかない要因となっている。

刀剣ブームを引き起こした『刀剣乱舞』や『るろうに剣心』と『KATANA』の大きな違いは、『KATANA』が刀職人に焦点を当てていることである。そして、職人の姿をコミカライズするだけでなく、日本刀に関わる「番鍛冶」「菊紋」「三丁掛」「下地研ぎ」などの専門知識をストーリーにはめ込みながら用いている。刀職人も「職人と一般の人たちとのパイプ役として日本刀の世界を紹介してくれている」(木下宗風: 装剣金工師)と認識しているようである。

読者の意見としても「KATANA を読んで、それまで刀剣についてはほとんど興味がなかったのが、その作り方や手入れの仕方等について知り、興味を持つようになりました」(ある

とねこ)、「中国地方に住んでいるので、刀や刀匠については少し身近に感じていましたが、もっと身近に感じることができるようになりました」(せい)、「実際に刀匠や鞘師や研ぎ師など 刀剣製作に関わる方々ともお話しできて KATANA を読んで得た知識で専門用語などでも ある程度分かった上で会話が来てとても楽しい時間が過ごせました」(ヨネサン表記ママ)などの回答が見られる。PIXIV FANBOX でのアンケートなので、好意的な回答が多くなるとしても、『KATANA』は、刀職人と読者の心理的距離を縮めていることが確認できる。

5. 教育システムの構築

かまたは、長野、福井、京都、山口各県の博物館に協力を依頼して「お刀女子会」「お刀鑑賞会」などを開催している。2017年4月22日の福井市郷土歴史博物館の刀剣展示会似合わせて刀匠、金工師、鞘師も加わり、「お刀鑑賞会」が開催された(図11)。また、刀匠の刀鍛道場で「炭切体験」なども実施している。かまたのこのような取り組みは、刀職人と参加者の心的距離を縮めている。参加者は一般女性が多く、伝統工芸士を目指す人はほとんどいないが、刀職人らのモチベーションが高まっているようである。



図11 刀イベントの広告と「お刀鑑賞会」



図12 若手への表彰式(八王子市HP) く一定の水準に達した座員は舞台上がっている⁷⁾。

人形浄瑠璃八王子車人形西川古柳座では、「車人形こども教室」を開催し、小中学生に車人形を指導している。幼少時に、実際の人形浄瑠璃に触れることで、伝統芸能に対する知的体系を形成することができる。これは、幼少時における実体験が大きく関係している(森田 2001)。「車人形こども教室」に参加した児童生徒には、そのまま座員となる人もおり、「若手の会」を結成している。西川古柳座は、性別や年齢に関係な

西川古柳座は、2022年1月に国の重要無形民俗文化財に指定されたが、その選定には、後継者育成も大きな要素となっている。西川古柳座の成功は、幼少時に実体験させることと、現代に適合した教育システムの実践にある。西川古柳座は、八王子市下恩方に稽古場があり、いつでも稽古ができる状態にある。若手は、放課

後など、好きな時間に稽古を行う。家元や兄弟子がいれば指導を受けるし、いなければ一人稽古を行う。教育委員会の支援もあり、2018年度には、当時中学生の阿部晃大、関内香水、藤原ありさが八王子市教育委員会から、部活動の成績優秀者とともに「伝承文化の継承」として表彰されている(図12)。

現在、職人の養成状況は大きく変化してきている。たとえば、「飯炊き3年、握り8年」といわれた寿司職人も半年で必要な技術や知識を学べる学校もあり、成果を上げている。アルバイトをしながら学べて、既に5,000人以上の卒業生を輩出している学校もある⁸⁾。伝統工芸の職人技術習得に特化した大学⁹⁾もある。このような学校は、受講生が効率よく学習できるだけでなく、職人も講師としての需要があり、職人にとってもメリットがある。伝統工芸の教育体系が変化しつつある現在において、日本刀製作においては、非常に高い条件を設定している。全日本刀匠会¹⁰⁾では次のように説明している。

刀鍛冶になるためには、文化庁からの作刀承認を取得している刀鍛冶の下で5年以上の修業をし、文化庁主催の「美術刀剣刀匠技術保存研修会」を修了する必要があります。この研修会へは4年の修業を終えた者から参加が認められます。(中略) 刀鍛冶を目指す場合、最も重要で難しい事は入門先を探すことです。刀鍛冶の多くは経済的に恵まれておらず、また責任の重さから弟子を取ることに消極的な人がほとんどです。

全日本刀匠会では、アルバイトに関しては、「アルバイトをしながらの修業となると、初めから時間的なハンディキャップを背負うことになります」と説明している。また、女性の希望者に関しては、「体力的にも大変厳しく、火傷などの怪我がある事、施設の問題などがあり、女性を弟子として受け入れてくれる刀鍛冶は、皆無といっても過言ではありません」と、ほぼ門前払いの状況である。

日本刀という高度な美術品のステータスを維持することも重要であるが、後継者不足で日本刀文化が衰退してしまうのは、残念なことである。開かれた教育システムの構築が望まれる。

6. 考察

刀剣ブームからわかるとおり、日本刀関連のコミカライズは、日本刀文化を身近なものに感じさせる効果がある。つまり、日本刀文化(伝統工芸)のコミカライズは、それ自体で日本刀文化の発展に貢献している。しかし、ブームで熱狂的なファンが増加しても、後継者問題の解決にはつながりにくい現状がある。まず、刀製造が非常に専門的であるため、専門的知識を習得する必要がある。その点、『KATANA』は、刀職人を主人公とすることで、刀職人とファンとの心的距離を縮め、基礎知識を愛読することで習得させている。

西川古柳座が、車人形こども教室や部活のような教育システムで後継者問題を解決した。危険を伴う刀鍛を幼少時に経験することは困難かもしれないが、炭切体験などを経験させ

ることは十分可能であると思われる。また、「美術刀剣刀匠技術保存研修会」を修了できなくても、刃物職人として生活していけるような社会システムが必要で、できれば、女性も参加できる環境を整えば、社会的な認知度も上がると考えられる。

以上のことから、伝統文化の継承には次の5つの要素が必要となる。

- (1) その伝統文化を身近なものと感じる。
- (2) 国や地域で、その伝統文化が価値あるものと認識する(共有認識)。
- (3) 幼少時に、その伝統文化に触れる。
- (4) 教育システムを整備する。
- (5) ある程度の技術を習得した時点で、生活に必要な収入が得られる。

(1) は、過去において地域共同体が担っていたが、現在は徐々に失われつつある。そして、現代においては、マンガ、アニメ、ゲームなどの果たす役割が大きい。(2)(3)は、本来、学校教育が果たすべき役割であるが、伝統文化を適切に解説できる学校教員は、ほとんどいないのが現状である。西川古柳座のように、関連団体が対応することも可能であるが、対応できる団体は非常に限られる。(4)は、関連団体だけでは不十分で、国や行政が関与しながら整備していく必要がある。(5)は、国や行政による伝統文化保護のための対策が必要である。現在、文化庁では「文化芸術の振興に関する基本的政策」において対策を進めているが、さらに充実した対策が求められる。現代社会では、最低限の収入を確保しなくては、後継者は育ちにくい。刀剣ブームで愛好家が増えることで刀職人の継承問題が解決しないのは、(3)から(5)までの要素に不備があるためと考えられる。

(2)(3)に関連して、小学校の国語科や社会科に、日本の伝統文化(伝統芸能や伝統工芸を含む)に関する単元がある。このような単元で、本稿で論じたような伝統文化への取材やコミカライズの過程を解説すれば、伝統文化に対する関心を高めることが可能であろう。光村図書の国語科教材には「伝統工芸のよさを伝えよう」(『国語四下はばたき』pp. 53-57)という単元や、「日本文化を発信しよう」(『国語六 創造』pp. 153-157)などの単元がある。これらの単元で、本稿で扱ったようなコミカライズ資料を用いて解説すれば、伝統文化をより身近に感じさせ、伝統文化に対する理解を深めさせることが可能であろう。また、マンガという現代日本文化の理解にもつながる。

伝統文化のコミカライズは、多方面で伝統文化の発展に貢献でき、また学校教育に活用することで、幼少時に伝統文化を身近に感じさせることが可能となる。さらに、伝統文化だけでなくマンガの担い手を生み出すきっかけをつくりだすことができると考えられる。さらに、伝統文化の担い手を生み出すには、教育システムの整備と行政の助成が不可欠である。

注

1. コミカライズとは、小説やドラマをマンガ化することに使われる和製英語であるが、本稿では「マンガ以外の素材をマンガ化すること」と定義し、英語表記では”comiczation”とする。コミカライズについては、すがや(2022)で解説されている。
2. カドコミ(KADOKAWAが運営しているコミックポータルサイト)の解説(2024.4.10)。
3. シテ方観世流能楽師の武田尚浩が主催する「能尚会」のHPより(2024.7.1)
<https://www.nousyokai.com>
4. 本稿で使用する職人の画像で注記がないものは、すべてかまたが取材時に撮影してきたものである。
5. 『刀剣ワールド：名古屋・丸の内』HPより(2024.7.20)
<https://www.touken-collection-nagoya.jp>
6. 八王子西川古柳座HP(2024.8.10) <https://kurumaningyo.com/cn10/pg21.html>
7. 若手の会メンバーの西川柳玉、西川柳里美、西川柳香、西川柳翔、阿部晃太、藤原ありさ、関内香水、今村恵璃らは、こども教室がきっかけで西川古柳座の座員となっている。後継者育成には、幼少時に実体験することが重要となる。図12の生徒は左から阿部晃太、関内香水、藤原ありさ。この時点で、既に公演の舞台に立っている。
8. 東京すしアカデミーHP(2024.6.10) <https://www.sushiacademy.co.jp>
9. 京都伝統工芸大学校HP(2024.6.10) <https://www.task.ac.jp>
10. 全日本刀匠会HP(2024.6.10) <https://www.tousyokai.jp/category/information/>

参考文献

- 木谷忍 長谷部正 飯塚聖司(2011)「持続可能な地域づくりのための伝統文化活動の可能性—地域集落の伝統文化活動と地位文脈の想起との関係に着目して—」『地域学研究』41-3 pp. 731-744
- 佐々木直彦(2015)「日本刀の製作技術」『溶接学会誌』84-7 pp. 6-9
- 柴田徳文(2015)「伝統文化の継承と発展—伝統工芸の将来—」『国士舘大学アジア・日本研究センター』10 pp. 71-80
- すがやみつる(2022)『コミカライズ魂『仮面ライダー』に始まる児童マンガ史』(河出新書)
- 谷村熙(1981)「日本刀研究の手引」『日本金属学会会報』20-5 pp. 351-357
- 辻本直男(1981)「日本刀」『世界大百科事典』23 pp. 417-423
- 早野慎吾(2019)『八王子車人形西川古柳座』1 立川言語文化研究会
- 早野慎吾 宮田好恵 松井洋子(2019)「マンガを活用した国語教育(2)—授業実践から—」『都留文科大学研究紀要』88 pp. 27-38
- 早野慎吾 かまたきみこ(2024)「伝統文化のコミカライズと教育—かまたきみこ『KATANA』を例に—」日本マンガ学会第23回大会発表資料

星野紘(2011)「無形文化遺産保護の学的研究 「日本の神楽衰退と対応策」『神奈川大学
国際常民文化研究機構 年報』2 pp.249-264

水木良光(2019)「日本刀の伝統的作刀技術と美術的価値」『表面技術』70-5 pp.40-45

森田勇造(2001)「野外伝承遊びの意義と重用性」『野外文化教育』1 pp.12-19

【付記】本研究は、日本マンガ学会第23回大会(京都精華大学 2024.6.22)の発表をもとに整理したもので、本稿は、かまたの取材資料とマンガ、および説明を受けた早野が執筆した。なお、本研究は、都留文科大学大学院共同研究費による研究成果の一部である。

【資料】

刀職人からの回答

日本刀と言うと、武士の魂、日本文化の粋、錆びる、高価・・・、ということで、敷居が高く、どうしても構えてしまう。しかし、実物では無くアニメになると、その怖さは半減、敷居も低く感じ、ちょっと、覗いてみようかなと言う気になる。さらに、紹介される刀剣にまつわる話しや、歴史が、なんだか楽しく感じられ、不思議と興味がわいてくるのは、私だけではないようだ。入館者不足で嘆いていた博物館、神社・仏閣も刀剣がアニメやゲームに取り上げられ、来館者が急増、今では、多くの施設が日本刀を展示し、クラウドファンディングで、復原・修復・写し製作等も行われている。マンガ・アニメには、多くの人の心を動かす力があるようだ!!

かまたさんの KATANA は、視覚とわかりやすい言葉で日本刀の魅力を伝えておられる。また、エヴァンゲリオンと日本刀展の開催のきっかけを作っていただいた。さらに、直接関係は、無いかもしれないが、刀剣乱舞のヒットがあり、若い人たちの間に日本刀ブームが生まれ、日本刀に関するクラウドファンディングの成立を支える支援者・ファンの増加は正に文化継承ではないか。私も、広島 KAZARU 展による、厳島神社の錦包籐巻太刀・腰刀の復原錦の製作クラウドファンディングでは、多くのファン・支援者が不可欠であった。遺産の保護の為、日本刀文化継承などと難しい言葉を使った訴えも悪くはなかったと思うが、かまたさんの声がけと、それに呼応した多くの皆さんの共感が無ければ成立・奉納できなかったと、あらためて感謝している。(三上高慶 刀匠)

側から見れば近寄り難い日本刀の職人世界に臆すことなく接してきて、その行動力と好奇心をもってじわじわと内部に入りこみ、今や職人たちに身内と認識されているかまたさん。職人はこうあるべきだと職人が自らにはめた桎梏(しっこく)をかまたさん持ち前のキャラで緩やかに外していってくれ、職人に柔軟な発想をするきっかけを与えてくれた功績は大きい。また、職人と一般の人たちとのパイプ役として日本刀の世界を紹介してくれている稀有な人でもあります。(木下宗風 装剣金工師)

KATANA という作品が世に出た事、また、作者と読者の距離感近い事、作品を通じて読者が刀そのものに興味を持つ事で、SNSを通じて依頼数が増えました。また、忘れられていた家宝などの発見も多く報告さ

れるようになり、これまでの「刀は愛刀家のもの」という意識から一歩踏み出し、守刀や家宝としての側面が強化され、もっとずっと身近な存在へと良い意味で変化してきています。（秋田勇喜 研師）

読者からの回答

KATANA を読んで、それまで刀剣についてはほとんど興味がなかったのが、その作り方や手入れの仕方等について知り、興味を持つようになりました。自分で実際に刀剣を入手しようというところまでは行きませんが、テレビやネットで関連の番組や記事（刀鍛冶の仕事について等）を見かけると、じっくり見るようになりました。かまたさんの取材の様子が紹介されているのを見るのも興味深く、それが作品の中に生かされているのを見ると、あれがこうなるのか、と理解が深まりました。また、去年 3 月に名古屋に行った時には、熱田神宮にも参拝し、剣の宝庫草薙館で様々な刀剣を見ることができました。付け焼刃ではありませんが、一緒に行った友人に、KATANA で得た知識を披露して波紋について少し説明などして感心されました。（あるとねこ）

KATANA を読む前からも世間一般的な漠然とした知識と興味はありましたが 本作品を読んでからはそれが強くなりました 幸い隣市には刀匠が工房を構えていて 基本的に見学も自由なのでそちらを訪れたり 隣県の備前長船刀剣博物館へも訪れてみたり どちらでもただ刀剣を見るだけでは無く 実際に刀匠や鞘師や研ぎ師など 刀剣製作に関わる方々ともお話しできて KATANA を読んで得た知識で専門用語などでもある程度分かった上で会話が来てとても楽しい時間が過ごせました（ヨネ）

かまた先生に直接メッセージを送る機会が持てて、とても嬉しく思います。私は岡山出身、広島在住の主婦です。地元は長船の近くなので、長船の刀剣博物館を訪れる機会も何度かあり、日本刀については多少馴染みがありましたが、美術品以上としての興味を持つほどではありませんでした。かまた先生の「KATANA」を読んでから、刀それぞれの背景にまで想いを馳せるようになりました。今までは刀剣博物館に行っても、ただぼんやりと眺めるだけでしたが、「KATANA」を読んでからは刃紋から装飾品、説明書きまで、とても興味を持ってじっくりと見るようになりました。今では家族みんな「KATANA」のファンで、家族でのお出かけも、山口県や島根県の刀剣が展示されている博物館を敢えて選ぶようになりました。息子は「KATANA」をきっかけに戦国武将にも詳しくなりました。家族で共通の趣味を持てるようになり、かまた先生にはとても感謝しています。これからも応援しています。（こじろ一）

「KATANA」この漫画が少年漫画だったら目にする機会が有ったかどうか、少女漫画での連載でしたので読み興味も湧きました。初めて読んだ時は特に刀に興味があった訳ではありませんでしたが話も面白くて今では大好きな漫画の一つです、刀剣ブームも有りきと他の読者さんも興味深く読まれていると思われま。女性作者さんですが実際の刀匠さん達と交流もされ専門的な事など凄い取材力だと思います。これからも長く読み続けたい作品です。（hibari1379）

研ぐ、という行為が主題となっている点がとても興味深いと思いました。研石にも色々な種類があることを知りませんでしたし、主人公が色々な研石を見てウツトリしている様は「推し」を眺めているようで、本場の職人さんたちもそんな気持ちなんだろうかと思いました。また、赤羽刀についてもこちらの漫画で初めて知りました。刀＝江戸時代よりも前の「日本のかつてあった御伽話のような文化」だけでなく、近代日本の歴史のひとつとして「持ち去られてしまった文化」の一面もあったのかととても勉強になりました。（渉）

「KATANA」を読んで、刀が作られる工程には沢山の職人さんの手がかかっていることを初めて知りました。刀の種類については、ただ耳にしたことがある単語としてしか分かっていませんでしたが、少し特徴などがわかるようになって嬉しかったです。中国地方に住んでいるので、刀や刀匠については少し身近に感じていましたが、もっと身近に感じることができるようになりました。美術館や神社で刀を目にする時に、なんとなく意識して観るようになり、日本刀に対する興味関心が増えたと思います。現代の刀匠によるエヴァンゲリオンをイメージした作品も面白い取り組みだなあと思いました。単行本の最後にかかっている取材内容もいつも新鮮で、知らなかった！そうなんだ！と思うことが多々あり、刀の世界への理解を深めるのにとっても役立ちました。物語としても、刀の個性豊かなキャラクターを作り出されていていつも楽しく拝見しています。これからも楽しみにしています。（せい）

私の母は、古美術商でした。昔、母から刀には関わってはイケないよ。特に血を吸った刀には触ってはイケないと言われたのを覚えています。しかし神仏には何故か惹かれるところがあって、本屋で偶然かまた先生の KATANA を手に取取ってしまいました。真剣は確かに見ているだけで何かを話しかけている気がしていました。もしかしたらそれが先生の本の魂魄と言うものかも知れません。また先生の本はその後も細く刀の構造やら、刀を研ぐ時の気持ちなど様々な刀の世界を見せて頂きました。刀の真の目的は人を斬ることでは無く、魔から主を守る事。そんな当たり前の事をこれからも若い世代に教えていって下さい。（稲垣）

The Contribution that the Comicization of Traditional Culture Makes to

Traditional Culture :

In the Comic Work "KATANA" by Kimiko Kamata

Shingo Hayano (Tsuru University) Kimiko Kamata (Manga Artist)

Abstract

In this paper, we will analyze the actual situation in which the comicalization of traditional culture contributes to the development of traditional culture · using the example of “KATANA” (Kimiko Kamata), a manga work about Japanese swords, one of the traditional cultural arts (traditional crafts). To produce “KATANA”, Kamata conducted a detailed survey of various craftsmen involved with Japanese swords, including not only swordsmiths, polishers, and sheath makers, but also charcoal makers who produce the charcoal used in the forging of Japanese swords. This has allowed him to incorporate the real process of Japanese sword making into his works, and many readers of his works are interested in Japanese sword making as well as Japanese swords themselves. In addition, “KATANA” has increased public interest in traditional craftsmen by holding sword appreciation events and charcoal cutting experiences at swordsmith dojos, among other events. Traditional culture is on the decline, and it is said that the first step is to make people aware of its existence and familiarize them with it. Manga and events based on traditional culture will create opportunities to learn about traditional culture and help solve the problem of traditional culture inheritance issues.